

年間第28主日

福音朗読 マタイ 22・1-14

2023.10.15 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日の第二朗読では、使徒パウロのフィリピの教会への手紙から朗読されました。その中でパウロは「わたしは、貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であって、ものが有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています」(フィリピ4・12) と言っています。

実際に、パウロの宣教活動の中を見れば、色々なことが不足していた時の方が多いですけれども、場合によっては、例えばフィリピの教会とか、そういう各地の共同体から援助を受けて、そして宣教活動もできるし、また、エルサレムの共同体のために託された援助を運ぶ、そういう豊かなことを背景にした働きもあります。

一方で、このフィリピの教会への手紙を書いた時には、パウロは牢屋に入っている状況なんです。でも、「今自分は牢屋に入っているから宣教ができません」とは言わないで、牢屋に入っているならば、牢屋に入っているときにできることをして、それがために牢屋全体にイエス様のことが知れ渡り、また、各地の信者たちの共同体が、パウロが牢屋に入りながら信仰を保っているということに力付けられるということになりました。

その時その時に、いろんな協力者や物質や状況がうまくいっているときでも、また協力者がいない——牢屋に入るような——うまくいっていないようなときであっても、どんな時でもそこに対処する、そういう秘訣を知っているんだというわけです。

その秘訣とは何かといえば、その次に言っている、「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」(フィリピ4・13) という、この一言に表れていると思います。神様がどんな状況でもそれを通して恵みに変えてくださる。神と共にある者の確信を表明しているということが出来ます。どんな時でも、こうでなければ役割を果たすことができないという中にパウロの考え方は留まっていなかったわけです。

今年の夏に、わたしはボーイスカウトのキャンプに一日だけでしたけども参加いたしました。そのキャンプには近隣の他のスカウトが二つ一緒に合同で参加してたんです。高円寺教会の杉並5団は、人数がかつてよりは大幅減ったと言っても、たぶんまだ自前でキャンプができるんだと思いますけれども、他の団は人数が減ってしまい、自分たちだけでキャンプができないような状況だということでした。それで、勿論スカウトの人数が減って自分たちのキャンプができないっていうことは残念なことではある反面、でも普段一緒に活動することがない地域の団と一緒に、他の団の子どもたちにも出会う、そういう交流という点では、人数が減ったっていう状況だからこそ体験できる一つの良い面でもあるということです。

それぞれの団が、たくさん子どもたちがいるならば、キャンプ場のキャパシティ、広さには限りがありますから、合同でキャンプをする、キャンプファイアーも一緒にやるというようなことは不可能なわけです。人数がたくさんいるときにはでもその時の良さがあるし、減ってしまったらそれを嘆くだけではなくて、それを通して近くのおんなじスカウト活動をしている団と出会えたっていう良い面、それを恵みとして受け取るというのが、信仰のものの見方とすることができると思います。どんなことの中にも、それを用いて神様が恵みへと導いてくださる、その信頼を持ち続ける、ということです。

今日の福音では、神様の招きということが、王様が自分の息子、王子様のために開いた結婚式の宴<sup>うたげ</sup>への招待としてたとえられていました。その結婚式の中で、招かれた人、本来来るべき人が来ないので、だれでもかれでもみんなそこに集められたということですけども、その中で一人、婚礼の礼服を着ないで宴席に出ている人がいたということが、たとえ話の最後の部分にありました（マタイ 22・11）。変だなあと思うかもしれませんが、王様の宴の衣装、婚礼の礼服は王様が準備するので、招かれた人はそこに行って着るものをもらいました。それなのに、それを着ることを拒否して、今までの自分の着ているもののままで出て行くっていうことは、招待を受けていながら招待を拒絶しているという、そういうようなことなんで、たとえ話の中では王様は怒っちゃうわけです。そういう人は、ある意味で今度は宴のご馳走が出てきてもご馳走に文句を付ける、そういうようなことかもしれません。婚宴の席に本来招かれてないけども招かれた、全く自分にとって新しい状況、未知の状況の中で、しかし今まで通りの服装でそこに行くこうとするということは、新しい状況の中でも今まで通りの行動、あるいはものの見方、やり方に固執する、というふうに解釈することができます。

神様は、そうであっても、決して手足を縛って外にほうり出したりする方ではありませんけれども、わたしたちの側がいろいろな状況が変わる、今までと違ういろいろな出来事や人に出会っても自分の側の考え方を変えていかない、どんなところでも神様が恵みに変えてくださるという信頼を持たないならば、自分自身が自分の心の自由を縛って、恵みに与れないようにしてしまうということはあるのではないかなと思います。

わたしたちは、パウロとおんなじように、やはりどんなことの中にも神様のほからいがある、そこに信頼して、色々な——教会の活動でもそうだと思います——その時その時に状況は変わっていく、しかし今まで通りにしていかなければならないと思うならば、そこに苦しさがあって、喜びが消えていきます。でもパウロのように今、この状況で出来ること、それを通して神様が恵みに導いてくださる信頼を持つならば、わたしたちはどんな状況にあってもいつも神と共にある歩みを続けることができるんだと思います。

ミサの中でわたしたちはいつも御聖体拝領を通してそのことを確認していると言ってもいいと思います。御聖体拝領のときに、みんな「わたしはこれを取ります」って選ばないわけです。奉仕者も選べない。手を出して、載せてくるものを、そこにイエス様がいらっしゃると信じて受け取るわけです。そうしてわたしたちはイエスと共に生きる思いを新たにし、力を頂くわけです。その御聖体拝領の動作そのものが、わたしたちの日常生活においても、神様から頂くものをそこに恵みが、イエス様がいらっしゃる、イエス様との出会いと信じて受け取っていくことへとつながりますように。

そうして、パウロと同じように、「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能」(フィリピ4・13)なのだということを、信仰によって自分に言い聞かせると言ったらいいでしょうか、自分に言い聞かせて、主と共に歩む、その思いを新たにしたいと思います。そのためだったらいくらでもイエス様が助けてくださるんだという信頼のうちに、それぞれの人生の歩みをまた続けて行きたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>